

Title	聖学院 100 年の歴史と展望 : 聖学院大学に期待すること
Author(s)	小倉, 義明
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume20, 2005.3 : 87-112
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3226
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

聖学院一〇〇年の歴史と展望

— 聖学院大学に期待すること —

小倉 義明

これから皆様と共に分かち合わせていただきたいと思っておりますことは、「聖学院一〇〇年の歴史と展望」です。これは実は、阿久戸学長から与えられた大変大きな題でございますが、その全体を括れるようなお話は私の手に余ることですし、また時間の限りもございませんので、全体を三つの部分に分けてお話をさせていただきます。

第一の部分は、この学校法人の淵源となりました教会的なバックグラウンドです。それをストーリーとして、ヒストリカルに瞥見したいと存じます。第二は、そのような働き人たちのうちの一人、ハーヴェイ・ヒューゴ・ガイという人を選び、この人物の思想を少し丁寧に見てまいりたいと思います。そして第三は、聖学院大学に期待することということで、一、二の点を申し上げさせていただくことになろうと思います。

第一部 ミッションナリたち

一九九五年、今から八年半ほど前のことですが、その年の九月に私は山本昂先生とベサニー・カレッジを訪問いたしました。大学、短期大学との姉妹校関係を提携するという用務で、山本先生に従って訪問したわけです。

ベサニーと申しますのは、ウエスト・ヴァージニアの一番北のはずれ、むしろ、ペンシルベニア、ピッツバーグから南に下りたほうが近いような辺境と言つてよい土地柄であります。そこにある千人くらいの小規模のリベラル・アーツ・カレッジです。

しかし、この大学は辺境の地にあり、規模が小さい田舎の町の大学というだけでなくて、実は大きな歴史的意味を背景に持った大学であります。一通りの挨拶を済ませ、大学の諸施設を山本先生と共に見させていただいたあと、私たちが案内を受けたのは、キャンパスの一面にあるグレイブヤード (graveyard) であります。その印象が私には忘れがたいのであります。

この聖学院の背景になりますのは、クリスチャン・チャーチ、ディサイプルス・オブ・クライスト Christian Church (Disciples of Christ) という教会であります。その教会の初期の指導者たちのお墓がそこにあります。「あつ、この人のお墓もここにあつたのか」と、感激の対面でありました。その代表はトーマス・キャンベルという人と、その息子のアレキサンダー・キャンベルという人でありました。その父子共に、グラスゴー大学を卒業しておりまして、父親トーマスはまもなく米国、新大陸に渡つてアイルランドの長老教会の流れを汲む一人でありました。主としてペンシルベニアを拠点として、そこで働きます。

息子アレキサンダーのほうも、大学の教育を終えて父親のもとにまいりますが、この父子共にペンシルベニアの山里、あるいは森林の中で働く人々が久しく聖餐にあずかつていない、教会的な礼拝を守ることができないでいるという実状を目の当たりにして、集まつてきた人々に同じように聖餐式を執行するのであります。

そのことをきつかけとして、彼は告発されるのです。そして最終的には、長老教会から除名を受けるのであります。すが、むしろそれを望むところだと言わんばかりに、彼らは所信に従つて新しい教会形成を始めるわけでありませ

それが一八〇九年のことです。

彼ら父子のもとには、リフオームド・バプテリスト (Reformed Baptist) と呼ばれる人たちがだんだん集まるようになりまして、やがてデイサイプルス・オブ・クライストという名称をもった運動体となるわけであります。ちょうどそのころ時期を同じくして、ケンタッキー州でバートン・ストーンという人を中心に、同じような考えの人々が現れ、彼らはクリスチャン・チャーチと自称いたしました。正確には、当時は、クリスチャン・チャーチスという複数でありました。

このペンシルベニアのアレキサンダー・キャンベルとトーマス・キャンベルという父子と、それからバートン・ストーンらのクリスチャン・チャーチとが一緒になったのが一八三二年のことですが、これで現在の教会の名前、クリスチャン・チャーチ (デイサイプルス・オブ・クライスト) という正式の教派の名前ができるのであります。

このキャンパスの中で見た光景、墓地で受けた印象の核は、のちほどもう一度立ち返ることができればと思っておりますが、そこにはあのマタイ福音書二八章の最後に出てくる復活のキリストが弟子たちを再招集して出した、大宣教命令と呼ばれる聖句であります。「あなたがたは世界に出ていって、父と子と聖霊の名において、バプテスマを施して、我が弟子とせよ」、という大宣教命令がこの墓地の中央に描かれています。

このキャンベル父子の墓碑の下部には、主イエスが言われました「収穫は多いが働き人が少ない」という聖句が刻まれています。その光景は、深く私の印象となりました。一言で申しますと、彼らの使命感です。既存の教会の中に安住するのではなく、もつと未開の地、働く人々の中に出ていかねばならないという使命感とその情熱が、一種のムーブメントのようになって西へ西へと、ペンシルベニアからオハイオ、ケンタッキー、イリノイ、インディアナと、どんどん広がっていくわけです。

一八四〇年に、その運動の広がりが高まりの中で、教職の養成の必要を感じて、キャンベルはカレッジを創設するのであります。それがこのベサニー・カレッジです。このカレッジは一八四〇年の創設後、一八九〇年までの五〇年間に五、五三六人の学生登録者を持っておりますが、正式に卒業した人は七一九人であります。その数が八分の一と誠に少ないのは、この大学がラテン語とギリシヤ語を重んじたために、途中でもうちょっと実務的な教育をしてくれる大学などに転出していった学生が多かったことを意味するものと、この大学の大学史が説明しております (p.171)。

そして、この七一九人の卒業生の過半が牧師、宣教師になっていっているのです。それに続くのは教育者です。あとは、法律実務家や医療の従事者の順番だそうです。こういう統計からしても、当時の大学の雰囲気を実によく分かっています。

さて、アーチボールド・マッククリーンという人をご紹介申します。この人物は一八七四年に、この田舎の小さな大学、ベサニー・カレッジを卒業しています。そして一八八九年〜一八九一年までは、同大学の第四代学長になっていきます。学長に選ばれたときも、彼は不承不承であったと言います。それから学長のあとは、FCMS (Foreign Christian Missionary Society) という名称ですが、このクリスチャン・チャーチ、デイサイプルス・オブ・クライストの海外伝道部門、その実質上の責任者になるわけです。そこに使命を感じて移りますが、学長職から離れるときは、理事会も教授会も非常に惜しんで、何度も慰留をしたということが書かれております。

このマッククリーンは、一九〇〇年以後、実に二十数年に渡ってこのFCMSの会長職並びにそのあと発展的に改称されたUCMS (United Christian Missionary Society) の副会長になつていられる人物であります。このアーチボールド・マッククリーンという人物は、ベサニー・カレッジの雰囲気を体現したような人物でありまして、アンゴラ教

会にやっつてまいります。

アンゴラというのは、インディアナ州の一番北東部にある、これまた田舎の小さな小さななんの変哲もない町であります。この町にあるトライステート・カレッジというのが、女子聖学院を開設しましたバーサ・クロウソンの卒業した学校です。トライステート・カレッジというので、学校関係から出された翻訳によりますと、トライ州立大学と書いてありますがこれは誤訳でありまして、トライステートです。インディアナとオハイオとミシガン、この三つの州の州境にある町なので、三つの州を見守っていますよという大きなビジョンを込めて、トライステートと言われたのだと思います。あるいは、聖書的に神学的にトリニティー (Trinity) の意味合いも含めていようでもあります。

今から一〇年ほど前、私はこのアンゴラの町にまいりました。インディアナ州の州都はインディアナポリスですが、そこから車に乗って三時間近く、郡役所があるとは言え、だいぶ田舎の町です。ところが、その町のアンゴラ・クリスチャン・チャーチに行きまして、感に堪えなかつたのは、そこでいただいた教会のパンフレットによりますと、その教会から一二〇人のミッショナリーが出ていと書いてあります。これは神学教育を正規に受けた牧師伝道者であるミッショナリーとは限らないのですが、とにかく福音宣教の使命をおびた、その自覚を持って海外に出ていった奉仕者たちが、牧師たちを含めて、一二〇人もこの教会が生み出しているのです。いかにこの小さな田舎町の教会が、霊的な充実を持っていたかが、その一点からも伺い知ることができます。

さて、これは一八九七年のことではありますが、そこにチャールス・S・メドバリーという一人の牧師が赴任してまいります。まだ三〇歳という若い牧師であります。バーサ・クロウソン、彼女は時に二七歳、まもなく二八歳になる人で、苦学の末、その年、トライステート・カレッジを卒業するのですが、ある晩の祈祷会でメドバリー牧師

が「私どもの教会は、海外にミッシヨナリーを送り出すだけの力を持ちつつあると思いますね」という話をし、そのために祈りましょうと教会員に呼びかけるわけであります。すると、その祈祷の席にいた一人の婦人が、突如叫んだのです。「あつ、それならバーサがいます。バーサ・クローソンこそそれにふさわしい人です」と。そのときから、私の心に祈りが芽生え、ビジョンが生じた、とバーサは後年語っております。

それからどのくらいでしょうか、恐らく一カ月か二カ月後に、この町のこの教会に先ほど紹介しましたFCMSのマックリーン会長がやってくるわけであります。バーサ・クローソンの手記をちよつとご紹介いたします。「そのころ、デイスイプルス教会、外国伝道協会のアーチボールド・マックリーン会長が、アンゴラの町に來られました。彼は、宣教師魂（これはミッシヨナリー・スピリットという言葉です）を持つ力に満ちた説教家でした。彼の話は聞く者に一つの挑戦でありました。マックリーン氏の説教の後、メドバリー牧師が申されました。『バーサ、あなたは今でも宣教師になりたいと思つていますか』。ついで数週間前か一、二カ月前に、ある婦人が自分の名を挙げて、バーサを驚かせたわけですが、そのときに芽生えた内心の深い思いを、このメドバリー牧師は見抜いたのでしようね。「そのとき以来の願いをあなたは今でも持つていますか」「はい、いつでもそう思つています」。原語は「Yes, always.」とだけです。「もしアンゴラ教会があなたを送ろうということになれば、あなたは行きますか」。「はい、喜んで (With my pleasure.)」。『では、準備の時を持ちましょう』。こうして準備の時を持つて宣教師考試試問を受けて、半年後に彼女は日本にやってくるのです。

ここで私どもは、このメドバリーという人物の（感化力）に注目したのであります。教会員の若い青年の心の中に生じたある高い願いと言いますか、志、祈りをこの牧師はちゃんと見抜いているのです。そして、それをそこで一時に決めてしまおうというのではなくて、数週間でしょうか、一カ月か二カ月か、そのぐらいの期間を置いて『

じっくりと見ているわけです。そしてあるとき、時をとらえて適切な質問をするわけです。「あなたは、今でも宣教師になろうという考えがありますか」。

このメドバリー牧師の人格的な感化により、ミス・クロウソンは、一生、このメドバリー牧師を尊敬し、「マイ・パスター」と呼んでおります。何かにつけて相談をしておりますが、年は二歳半しか違わなかったのです。師弟と言うには本当に年が近かったのですが、それでも指導者であり、一方はその弟子であることに感謝を持っているのです。

このころの記録をいくつか読んでいて、私が発見したことを、きょうは皆様に申し上げたいのであります。『女子聖学院五十年史』には、二度FCMSから調査団がやってきたとあります。このマッククリーンもやってまいりませし、マッククリーンのこよなきヘルパーであったコーレーという副会長もやってきましたし、副会長コーレーと共によつてきた人がパウアー博士という人です。これは『女子聖学院百五十年史』によると、トランシルバニア大学の教授となっておりますが、これは間違いでして、トランシルバニアと同じキャンパスにあったカレッジ・オブ・ザ・バイブルという大学の教授なのです。今はキャンパスはちよつと離れて、ユニバーシティ・オブ・ケンタッキーの真ん前にあります。これがこんにちのレキシントン神学院で、一九七一年から一九七二年にかけて、大木英夫先生がその客員教授をお務めになりました。

その教授、パウアーの名前だけは知っておりました。当地のセントラル・クリスチャン・チャーチは、先程申しましたバートン・ストーンとアレキサンダー・キャンベルの両者が合同いたしますが、その合同の会議場になった大きな教会です。パウアー教授はこの歴史を書いているのです。『ヒストリー・オブ・セントラル・クリスチャン・チャーチ』という本です。その著者がこのプロフェッサー・パウアーでありまして、当時の牧師がこのバ

ウアー教授を巻末で詳しく紹介しているのです。

それを読みましたら、このパウアーさんが何と若き日、元来はメソジストだったのですが、インディアナ州アンゴラの町でメドバリー牧師にふれて、そしてクリスチャン・チャーチの会員に変わるのです。メドバリー牧師から大変影響を受けたと書かれておりました。なるほど、メドバリーという人はそういう人だったのだと改めて感じました。

このパウアーさんは、このトライステート・ノーマルカレッジを出たあと、コロンビア大学で勉強して、そのあとこのカレッジ・オブ・ザ・バイブルの教授に招かれて、最後は副学長になられた人です。のみならず、このあとメドバリー牧師はドレイク大学でも大きな感化を及ぼすことになります。

次のドレイク大学というところをご覧ください。このドレイク大学の通りの真ん前に、ユニバーシティ・プラザ・チャーチという教会があります。これはセントラル・クリスチャン・チャーチ・イン・デモインのブランチ・チャーチです。今度ドレイク大学ができたので、その大学を自分たちのミニストリーとしましょうということで、大学の真ん前にブランチ・チャーチを造って、そのセントラル・クリスチャン・チャーチの主要なメンバーがそっくり、このユニバーシティ・プラザ・チャーチに移って来るのです。そのときに選ばれて牧師となったのが、このメドバリーでありました。

彼は一九〇四年の一月に、このユニバーシティ・チャーチに着任して、亡くなる一九三二年まで二八年間ここで牧会をいたします。最後は、日曜日の朝の説教を終えたあと、その場で絶息するという劇的な説教者の生き方を貫いた人であります。彼は、このドレイク大学にまいりますと、チャプレン (Chaplain) に選ばれ、また実践神学を講じる教授になり、後半は大学の理事として奉仕をいたします。亡くなったときは、学長が弔辞を書いております

が、「ドレイク大学の精神的な父だった」と讃辞を惜しみませんでした。

さて、このドレイク大学ですが、アイオワ州のデモイン市にありまして、現在、六つの学部、大学院、があつて、全体で六、五〇〇人ほどの大学であります。その大学の名前が示しておりますように、一八八一年、フランシス・マリオン・ドレイクの創設であります。このフランシス・ドレイクという人は、南北戦争に北軍の将校だった人です。血気盛んな独立アイオワ連隊を率いて、戦争が終わるころは准将として、一個旅団を率いて戦いました。重傷を負つてほとんど死ぬばかりで、南軍の兵士は、重傷を負つて息も絶え絶えなので放つておいてももう生きられないだろうと言つて、見過ごして行つたという逸話の持ち主であります。戦後、彼は戦乱の悲惨を考えたのでしよう。実業界に身を投じて、銀行あるいは森林、鉄道などの事業を広げて成功し、最晩年はアイオワ州の州知事を務めております。この人は富の全部を、教会と福祉と教育に捧げるのであります。

このドレイクの寄附によつて造られたのが、ドレイク大学です。このドレイク大学の中に、ベル・ベネット・ミッシヨナリー・ソサエティーというのが作られました。ベル・ベネットという大学の女子学生が、ミッシヨナリーとして派遣される数日前に亡くなつたので、大学の学生やファカルティが惜しんで、彼女の名前をとつて献金を募り、彼女の名において人を宣教師として送り出そうということになりました。大学の中でそういう雰囲気があるのです。

ここにローダスカ・ワイリックという人がおります。ワイリックは、どうも記録を見ても卒業したとは書かれていないのですが、このドレイク大学の医学部、メディカルスクールに学びました。そして、このベル・ベネット・ミッシヨナリー・ソサエティーの後援のもとに一八九〇年に日本へやつてまいります。時に三四歳です。女子聖学院を始めたバーサ・クローソンも、二八歳で日本にやつてきて、女子聖学院を始めたときはその一〇年後、三八歳

です。結婚も考えないで、ひたすら使命に尽くそうという覚悟であります。

彼女は、ミッシヨンからの費用だけでなく、自分に与えられた給与をこつこつと貯めて、自力で小さいながら教会を造るのであります。それが関口教会と申します。のちに小石川教会こんにちの小岩教会の前身になります。彼女は、この小さな新しくできた教会堂を「ドレイク・チャベル」と称したそうです。折から、日露戦争の最中ですから、満州の荒野で傷ついて帰って来た人たちが陸軍病院にいます。そうすると、彼女は医師の資格は持つていたかどうか分かりませんが、医療の心得の十分ある人でしたから、しばしば病院を訪れて、希望を失った傷痍軍人たちに慰め、励ましたということですから、これらの傷痍軍人たちは、東洋のナイチンゲールだと言つて、ローダスカ・ワイリックを敬愛したということです。

休暇で彼女はやがて帰国いたします。年老いた母親が気になったのでありましょう。母親を見舞つたあと、自分も病院で検査を受けますと、なんとガンであることが発見されたのです。しかし、彼女は「私には、日本にやり残してきている仕事がありますから帰ります」と言つて、日本に帰るのです。そして半年後、日本で亡くなります。一九一四年（大正三年）のことです。時に彼女は五八歳でした。お墓が染井の墓地にあります。葬式には、彼女が育てた根本正代議士という当時の政友会衆議院議員他、多くの人々が参列したということでもあります。

第二部 H・H・ガイの講演

さて、ハーヴェイ・ヒューゴ・ガイ（H・H・ガイ）のお話をしたいと思います。夫妻ともドレイク大学を一八九三年に卒業し、同時に結婚して、直ちに日本にやっ来てまいります。即ち、ローダスカ・ワイリックより三年遅れ

て日本にやっつてまいります。

ガイ夫妻は先輩のワイリックを尊敬し、彼女の働きを助けて日本語を勉強するのであります。この年、チャールズ・エリアス・ガルストが休暇から戻つてまいります。五年後、ガルストは亡くなるのですが、一八九八年（明治三二年）、女子聖学院を造るミス・クロウソンがやっつてまいります。同じ年にガルストが召天しております。

そういうわけで、クロウソンはガルストと会つていられるかもしれませんが、記録がありません。クロウソンがやつてきたのはこの年の四月の終わりです。ガルストが亡くなるのは一二月ですから、半年しかだぶらないわけです。ガルストは当時、デイサイプルス教会派遣のミッシヨナリーのなかで指導的な一番の年長者でありました。そのガルストが召天しましたので、ガイが指導的な立場に立つのであります。

一九〇〇年、つまりやっつて来てからちょうど七年目に、「フアラオ」で彼は一時休暇帰米いたします。シカゴ大学とエール大学はデイサイプルスつながりがあるようでした、シカゴ大学かエール大学で、博士号の学位を取つている人が他にも何人かいますが、ガイはエール大学からPh.Dを取つて、その年の九月に日本へ歸つてきます。日本に歸つてくる途中、ドレイク大学に立ち寄つて、ミスター・ドレイクに日本で学校を始めたいという志を述べたそうであります。するとドレイクは、一万ドルのお金をその場で出してくれたということでもあります。

彼は、翌年（一九〇三年）本郷で、小さいながら私塾のような神学校を開校し、その間、将来の学校経営に適する土地を探して、滝野川に本校舎を造ります。現在の駒込キャンパスのはじめであります。それが一九〇四年の九月のことです。そういうわけで、昨年二〇〇三年の三月が神学校開校一〇〇周年なのですが、現在地に移つてきてから、今年が満一〇〇年になります。

小さな神学校でして、校長はガイ、教授に石川角次郎、宮崎八百吉、この三人が専任教授です。石川角次郎先生

については申し上げるといろいろありますが、学習院の教授でありました。栄職を投げ捨てて、どうなるかも分からないこの小さな神学校の教授になるのであります。

それと共に、ガイは本郷でやっていた日曜礼拝を滝野川の地に移して、神学校の教授方や学生と共に、滝野川基督教会を創立いたします。それがこんにちの滝野川教会のはじめであります。同時に、聖学院英語夜学校をはじめていきます。そして一九〇六年に、男子の中学校を開設いたします。惜しくもご夫人が病気になるまで、一九〇七年に帰米せざるを得ませんでした。

ミッシヨナリーたちの生活の様子を見てみますと、ご夫人が病気になるケースが結構少なくないのです。そのためにやむなく帰国しているという方が、ほかに何人もおられます。ご婦人は慣れない文化環境・言語環境の中で、生活を続けていくことが困難であったでしょう。

そういうわけで、ガイ先生が日本で神学校あるいは男子の中学校で教えられたのは極めて短い期間でした。中学校たるや丸一年しかおられず、神学校からしても三年しかおられません。しかし、極めて短い期間であります。そのうちのち忘れがたい影響を与えることになりました。その点で、札幌農学校のクラーク先生がわずか一年に満たない在日でしたのに、そのあとの卒業生たち、学校の雰囲気にな大きな影響を残したということを思い起こさせるような話ではないでしょうか。

さて、彼は帰米後、一九〇七年〜一九二六年までは主としてカリフォルニアにおりまして、そこにあるバークレイ神学院や太平洋神学院の教授を務めます。そして、そのあと一九三六年の召天まで日米親善に尽されます。よく知られているようにカリフォルニア州で土地法の問題ですとか、それから国会で移民法の排日条項が決議されます。大正一三年（一九二四年）のことです。そうした排日的な運動が起こっている中で、ガイ先生は首尾一貫して日米

親善のために、また日本人のために、その生涯をお使いくださったのであります。お帰りになったあと、一九二七年（昭和二年）と一九三〇年〜一九三二年までと、二度来日されております。

ガイ先生が一九二七年、第一回目に日本にやって来られたとき、「東西文化の融合」という講演をされました。男子聖学院の『聖学院八十年史』によりますと、この講演を聞いたあと、聴講した人たちが非常に感動して「決心者」が出たそうです。それは洗礼を受けクリスチャンになろうという志を持った人、および既にクリスチャンではあるけれども、もう一度新たな思いをもってこの自分を神様の御用に捧げたいと決心する人（再決心者）の多分両方いるのだと思いますが、一五〇人の人が決心を披瀝したと書かれています。

それほど、この人は日本語の達者な人でありまして、ここで印刷させていただきましたものは、彼の文章であります。『聖学院八十年史』では語り言葉でありますが、女子聖学院では当時『ともがき』という雑誌が出ておりまして、そこに掲載されている文章は、文章体である調であります。やや長いところではありますが、当時の雰囲気やまた歴史的な意味で、こういう文章に触れていたくのも皆様のご参考になるかもしれないと思ひまして、あえて紹介申し上げたいと思ひます。読ませていただきます。

「二〇世紀のはじめにおいて、もつとも著しく感ずるのはなんであるかと言うならば、西洋文化と東洋文化の接触ということである。この二つの文化は、幾千年の間、異なつた方面に伸び進化したのである。その流れ、その歴史の間に特殊なる風俗習慣をつくり、特殊なる哲学宗教を組織し、特殊なる生進を進めてきたのである。大本は兄弟であつたけれども、今相対するときには、互いに驚き、互いに疑う次第である。この異なる文化が相対すると、そのところに多少の誤解、多少の疑問が起ることは免れない話と思う」。

これは多少どころでなくて、先程申しましたように二、三年前、排日法案が通つたわけで、米国でも日本に

対する警戒心が沸騰しているときですし、これに対して日本の側でも、この抗議を米国政府に対して向けているという、そういう緊張の強い時期であります。

「多少の誤解や疑問が起こることは免れない話と思う。けれども、この文化には、東西文化それぞれには、おのおの気高い高尚なるところがそれを保存し、それを来たらんとする理想的文化に貢献することが、私たちの義務と想っている。そもそもこの高尚なるもの、気高いものは、どんなものであるかということ、皆さんと共にしばらく研究してみたいと思う」。

と言いまして、このあと東洋文化、儒学や文教についてかなり詳しく言及しております。

この人は和歌、俳諧、芭蕉や蕪村を自由に引用することのできた人だそうです。中江藤樹などの勉強をよくやっていたのです。そうした東洋文化への教養と言いますか、それらを披瀝し、それに対して十分な尊敬を持って披瀝したあと、最後に、東西文化の融合、世界平和を言うのです。

「また世界平和ということを考えるときに、たしかにこんにちの状態は、東西文化の融合を待っている。もしこれを融合することができなかつたならば、世界の将来はあまり有望でないと、私は深く信ずる」。

おめでたい樂觀主義者というのとは違うのです。かなりリアリスティックな目を持った人であります。世界の将来はあまり有望でないと言うのです。

「また、この二つの文化融合のために努力することは、皆さんを尊敬する立場から言うならば、皆さんの義務だと。そしてまた私一人のことを申し上げるならば、これは私の一つの使命であると考え。これまでは、人がおのおの自分の文化、文明だけを研究し、一面だけを見て東西文化の融合はできないと考えていた。日本の哲学、インドの哲学、即ち東洋の哲学のみを研究していて、あまり深くは西洋の哲学を知らない。それで、

これはとても融合すべきものではないと言っている学者がある。人種問題を考えても、自己が属している人種だけを研究して、とても人種を融合することはできないと決めた。しかし、私はたしかにこれを統一することができる。これらの人種を、これらの文化をたしかに調和することができると深く信じている。また、できるのみならず、できなければならない。できなければ、これまで申したとおりに将来はあまり安全ではない。日米親善、日米問題、人種問題、宗教問題、文化問題等、どうしてもこの二つの文化を融合しなければ、解決はできないと思う」。

「それならば、これを融合するのに必要なものは何であろうか。まず第一に忍耐である。幾千年の歴史を持つている問題であるから、そんなことは朝飯前の仕事などと思つてはならない。これは時間のかかる問題である。そんな早く解決することはできない」ことを言います。

「それから、その次に必要なものは同情である」。「同情」という言葉には独特の意味合いが込められています。他国の文化を研究するときに、他国の宗教を研究するときに、どうしてもそれに同情しなければ、共鳴し、深く理解するといふぐらいの意味でしょう。「そういうことがなければ、その宗教、その文化を真に理解することはできない。できるはずはない。例えば、その宗教を自分のものと信じなくても、それに同情しなければならぬ。キリスト教徒が仏教を研究するときには、例えば仏教を自分の宗教としなくても、それに同情しなければ、仏教の仏教たるところが分からない。同じように、仏教徒がキリスト教を研究するときには、例えばそれを自分の宗教としなくても、それに同情して興味を持つて研究しなければ分からないのである。キリストの言葉に『敵を愛しなさい』という言葉がある。ある人は、敵を愛するなどとてもできないというかもしれないが、しかなできないことはない、できるのである。私はこの間、旅順港に行き、明治四〇年に日本政府が建てたロシア

ア兵の祈念碑を拝見した。それは、古いロシアの墓場にある。その背面に書かれた言葉を読んで、私は非常に感動したのである。それは堅苦しい漢語で書いてあったが、私は写して持ってきた。『ああ、不幸にして一命を落とすものあらんか。例え、仇敵といえどもこれを覆い、これを埋めるをもって、まさに本務とすべきなり。けだし、これによっていつは忠義を励まし、いつは人愛の道をひろむればなり。いわんや昨年は仇讐たりといえども、こんにちは既に友好たるにおいてをや。』私のもつとも感じたのは次の句である。『いわんや昨年は仇讐たりといえども、こんにちは既に友好たるにおいておや』。これを読んで思わず繰り返した。なお、末文に『即ち、ここに碑標を建て、もつて英霊を百世に弔し、その義烈を千載に編む』とあるのを読み、これは実に敵を愛する精神の発露であると感心した。

こういう漢文を自在に読める教養を持つていたのです。バイリンガルだったのです。敵を愛する。これは死んだ人に対する言葉ですが、もう一步進んで生きている敵を愛する。そこまでの同情がなければ、少しもこの人種問題は解決することはできないし、またこの東西文化を融合するということは不可能であるというので、この文化融合の提唱も著しく宗教的な根拠、可能根拠にまで深まるのです。そこまでの同情がなければならぬ。そこまでの同情がなければ、人種問題は解決しません。

さらに次に必要なものは、献身、犠牲の精神だと言っています。同じ旅順港の近くに東鶏冠山があつて、年配の方はご存じだと思いますが、ここで日露両軍は激烈な戦闘をやりませう。そして激戦の結果、日本軍がついに奪取いたします。それはどうして可能になったかと言うと、献身、犠牲の精神の結晶であるとあります。当時の日本人の気持ちをしつかりつかまえながら、大いに献身、犠牲の精神でやらなければならぬと言つてまとめています。

そして最後に「この東西両文明を融合する力はどこにあるかと言えば、それは人種以上、国家以上の宗教の力で

ある」。超宗教的とも言えるでしょうか、その宗教、その絶対の宗教、その徹底したる宗教、その人格の宗教に頼らなければ、この問題を解決することはできない。人格の力、人格的宗教にこそ文明融合の力があると言うのです。

「私はこの徹底した絶対の宗教の力によって、初めて東西文化の融合ができる」と深く宗教、哲学、国体等を誤りなく紹介するのが、私の使命である。日米の親善を図り、平和のために働くのが私の目的であると深く信ずるのである。それであるから、日本にいらつしやる皆さんは、どうかそのような同様の使命感を持って、あなた方のような学問を十分に修めて、また将来有望である皆さんが、もし我々とその使命を同じくせられるならば、たしかに将来の永遠の平和のために有力なる運動ができると、深く信ずるのである。

だから、東西の分離を忘れ、日本人であることを忘れて、日本人であることを超え出て、白人であることを超え出て、一段高い人種以上の絶対の宗教の状態、徹底した宗教の状態に向上していただきたいのである」。

いかがでしょうか。これは昭和初年の日米の緊張がただならぬ状態になろうとしているときの、一宣教師の考えていたことでもあります。

ガイ講演から学ぶ点の第一は、「使命感」です。ミッシヨナリーたちはミッシヨン、センス・オブ・ミッシヨンで生きています。これはつまるところ献身です。犠牲を覚悟の上の献身です。ガイ博士の言葉で言うところ東西文化の融合です。文化的な表現で映せば、キリスト教文化総合ということで、ガイ博士は、その実践としての日米親善に一生を使うわけです。

「精神的バイリンガル」とは、大木先生が二、三月月前にお使いになった言葉であります。たしかに私たちは精神的なバイリンガルである必要があるのです。本学は、その意味でヴァンテッジ・ポイント (vantage point) に立っていると思います。歴史的体質から言って、我々の先人がこういうスピリットを持っていたという点で、ヴァ

ンテッジ・ポイントを持っていると思います。大変ダイアレクティック (dialectic) でダイナミックな、そういう歴史展望を持っていた、そのビジョン、スピリットに教わる思いがいたします。

第三部 大学の生命と使命

以上、草創期のミッシヨナリーたちのいくつかのエピソードを申し上げたのですが、そこから見出されるのはまず使命感、フロンティア・スピリットです。ガルストなどは明治一六年、まだ汽車もないときに、汽船で日本海を秋田まで行っているわけです。東北の雪深い田舎へ、フロンティアだから出ていくのです。そういうスピリットを持っています。

もう一つは、人を育てるといふことです。ガイ先生もそうですが、その前はメドバリー牧師の話をしました。あるいは、その前にFCMSの会長であったマックリーンの感化力について述べました。彼は宣教師魂を持った力に満ちた説教家だったと言います。そういう人格的な感化力を持っていたのであります。以下、「感化」といふ言葉を使わせていただければと思います。

それから「貢献する」といふ言葉が何力所にも出てまいります。国家社会に、文化に貢献するのです。それから出て行った先で、同志をつくり手を携えて連携するのです。これは、ガイ先生も、あるいはガルスト宣教師もやっていることです。それから文化融合の理想、こういう事柄を私たちは学んだと思います。

上記のような学院創業の精神の継承と展開は、聖学院大学の理念においてなされております。この理念形成は第二の創業と言えます。つまり、聖学院大学の出發、その形成は第二の創業であります。それは、第一の創業に比肩

すべき、ある意味でそれを凌駕する画期的な精神の表白であります。

創業ということを考えますとき、聖書における創造ということと重ねて考えることが可能だと思えます。聖書における創造というのは、あの創世記の第一章にあるように、地は虚しく混沌としており、闇が覆っていたところ、神が光りあれと声を発せられるのであります。即ち、無や混沌に対抗する神のご意思、これが創造であります。別言すると、無から有を呼び出す。伝統的な神学用語で言いますと、クレアチオ・エクス・ニヒローという言葉です。混沌から秩序を創り出す戦いであります。創造は、神において必然的に戦いでありました。それは無が単に空虚、何らかの欠如状態を意味するよりは、あの宇宙のブラックホールのように、有なるものを呑み込むような力を持つものだからです。無の力、それに有なるものすべての存在は呑み込まれようとする危殆に瀕しております。神の創造は、存在を無の力から取り戻そうとする救済の業であります。イザヤ書における創造の概念は、そういう救済論的な意味を持っています。

ゲーテの『ファウスト』の最初に、メフィスト・フェレスが現れて自己紹介をいたします。「私は否定の霊」と言うのです。これはなかなか意味深長な言葉であります。すべて存在するものを否定していくのです。しかし、聖書のメッセージの大きな力は、神の有への大肯定なのです。無の力から有を引き出して、これを守ろう、救済しようという大いなる肯定であります。否定の力はデモニーニク、悪魔的ではありますが、これに負けない。聖学院大学の大学形成は、このような聖書の創造に鼓舞されて進められてきたと言えましょう。

そこで、聖学院大学の理念のすべてに渡って申し上げるわけにはいきませんが、一、二点申し上げさせていただきます。理念はご存じのように全一〇条であります。その中で伝統の継承ということが、繰り返し表白されています。この場合、伝統とはディサイプルス教会の教派的な信条を言うものではありません。それを突き抜けて、聖

書と宗教改革が証する福音の伝統を意味しています。プロテスタント的なそうした信仰、歴史に根ざしているものであります。

第二の点を申し上げたいと思います。それは先程来申し上げている感化力、教育、育てるということでもあります。詳しく申し上げる時間がなくなりましたので、大急ぎで通り過ぎるだけですが、事務職の人々はただいまドラッカーを勉強しています。田辺人事部長代行が『プロフェッショナルの条件』という本を、必読書に課して、事務職の皆さんにぜひ読むようにと言われました。私も読みました。大変教えられました。

「何によって知られたいか——シュンペーターの教訓」というところが、この本のパートの三にあります。これはセクションの題になっています。

「最後にもう一つ経験がある。これで自己啓発についての私の話は終わりである。ちょうど、ニューヨーク大学でマネジメントを教えるようになった一九四九年のクリスマスに、七五歳になっていた父、アドルフ（ピーター・ドラッカーの父）が数年前の退職以来住んでいたカリフォルニアから東海岸へ、知り合いに会いに来た。一九五〇年の一月三日、父と私は父の昔からの友人である、あの有名な経済学者シュンペーターを訪問した。当時、六六歳で既に世界的に有名になっていたシュンペーターはハーバード大学で教え、アメリカ経済学会の会長として活躍していた。オーストリア大蔵省の官僚だった父は、大学で経済学を教えていた。一九〇二年、父は一九歳の俊才、シュンペーターと出会った。二人にはまったく似たところがなかった。シュンペーターは雄弁で行動家、自信家だった。父は、静かで落ち着いた謙遜家だった。二人の友情はずっと続いていた。既にシュンペーターは名を成していた。ハーバードでの最後の年を迎えていた。その名は絶頂期にあった。二人は、昔話を楽しんだ。いずれもウィーン生まれで、ウィーンで仕事をしていた。二人ともアメリカに移住して

きた。シュンペーターは一九三二年に、父はその四年後に移住した。突然、父はニコニコしながら『ジョーゼフ、自分が何によつて知られたいか、今でも考えることはあるかね』と聞いた。シュンペーターは大きな声で笑った。私も笑った。と言うのは、シュンペーターはあの二冊の経済学の傑作を書いた三〇歳ごろ、ヨーロッパ一の美人を愛人にし、ヨーロッパ一の馬術家として、そして恐らくは世界一の経済学者として知られたと言つたことで有名だつたからである。彼は答えた。『その質問は、今でも私には大切だ。でも、昔とは考えが変わつた。今は一人でも多く優秀な学生を、一流の経済学者に育てた教師として知られたいと思つてゐる』。恐らく、彼はそのとき父の顔に浮かんだだけげんな表情を見たに違いない。と言うのは『アドルフ、私も本や理論で名を残すだけでは満足できない年になつた。人を変えることができなかつたら、何も変えたことにはならないからだ』と続けたからである。彼はその五日後に亡くなつた。なかなか印象的などころであります。

もう一箇所、「何によつて覚えられたいか」が、今度はセクシオンではなくて章の題になつてゐるところがあります。一番終わりのパート五の第三章です。「何によつて覚えられたいか」という章題の一番末尾をご紹介します。

「私が一三歳のとき、宗教の素晴らしい先生がいた。教室の中を歩きながら『何によつて覚えられたいかね』と聞いた。誰も答えられなかつた。先生は笑いながらこう言つた。『今答えられるとは思わない。でも五〇歳になつても答えられなければ、人生を無駄にしたことになるよ』。長い年月が経つて、私たちは六〇年ぶりの同窓会を開いた。ほとんどが健在だつた。あまりに久しぶりのことだつたため、はじめのうちは会話もぎこちなかつた。すると一人が『フリーグラー牧師の質問のことを覚えてゐるか』と言つた。みな覚えていた。そしてみな四〇代になるまで意味が分からなかつたが、その後、この質問のおかげで人生が変わつたと言つた。こ

んにちでも私は、この何によつて覚えられたいかを自らに問い続けている。これは自らの成長を促す問いである。運のよい人は、フリーグラー牧師のような導き手によつて、この問いを人生の早い時期に問いかけてもらい、一生を通じて自らに問い続けていくことができる。

これでこの章を閉じるわけです。なかなか含蓄のある話ではありませんか。

オスラー博士のことも申し上げたい。オスラーという人のお名前はご存じでしょうか。日野原重明先生が『平静の心』という本を翻訳しておられます。今世紀初めにジョンズ・ホプキンス大学の医学部を創設した偉い先生です。日野原先生が大変尊敬なさつて、時々引用されている方です。それは、全部で一六の講演を集めた本ですが、そのうちの第三章に「教師と学生」という講演があります。その扉裏に題詞として、ジョン・ヘンリー・ニューマンの言葉を掲げてあります。こういうものです。

「真に大学を構成し、活気づけるものはある種の人々が、他の人々の上に及ぼす精神的な感化である。この感化力を欠く大学は、大学と言つても名のみで、まさに大学本来の姿を見失つている」という言葉です。これは三〇ページです。三六ページにも、ニューマンが似たようなことを言っているのを、オスラー博士は引用しています。

大学ですから、知的な訓練は申すまでもありませんが、その知的な訓練を支える土壌が大切です。それが人格であります。その人格的な感化力が霊育という言葉で言い表されています。もちろん聖書的、宗教的にも独特の意味合いがありますが、オスラーはこのように言っております。教師に必要な資格として三つ挙げております。

一つは情熱を持つ人でなければなりません。教師は情熱を持っていなければ駄目だということです。釈迦に説法ですけれども、マックス・ウエーバーが『職業としての学問』や『職業としての政治』において、両方ともその要件として、情熱を挙げています。政治家にとつても情熱は必要だ、学者にとつても情熱なしにはできないとい

うことを言っていますが、オスラー博士も情熱を挙げています。次に、自らが教える専門分野での十分な知識。これは当然ですね。三番目に、義務感が必要とされています。センス・オブ・オブリゲーション (sense of obligation) という言葉を使っています。そして、学問や大学に寄与する気概を持たねばならないということを行っています。

そして最後に、学問をする者、医療に携わるものの生き方として、こういうことが書いてあります。「聖書に接触せよ」。そういうタイトルです。そして次のように言います。キリストがニコデモに与えたメッセージです。ユダヤ人のラビが夜ひそかにキリストのもとに訪ねてきます。神の国に入るにはどうしたらよいか、そっと聞きに来るわけです。そのときキリストがニコデモに与えたメッセージは、こんにちほど我々が必要とする時代はないということです。即ち、あなたがたは霊から生まれねばならないということを使った。霊から生まれねばならない。これを大学の先生方や大学院の学生、医学生に向かつて言っているわけです。「キリストと共に、主の祈りで一日をはじめていただきたい」というのです。聖学院の歴代の指導者たちも、霊育を尊重したいということをお話します。

最後に、ダニエル・ベルの『知識社会の衝撃』について一言申し上げます。これも先程申しましたように、単なる知識は知識とは言えない。それはデータや情報に過ぎない。真の知識、真に知識と呼ばれるべきものは意味を含み、その意味を表すようなものだ、そして判断の基準になるものだ、と言うのです。

この訳者は山崎正和教授ですが、その解説によれば山崎教授は、知識に意味を与えるものは知識そのものではなく、より高次の知恵もしくは創造力であり、知識はそこに接触しようとしなくてはならないということを行っています。ついでに申しますと、この訳者、山崎教授はダニエル・ベルがラインホルド・ニーバーを尊敬し、ニーバーの理解を一字一句捉えているということを三カ所で言及しております。

それから、山崎教授は、ベルは愛を動機として思索していると言っています。ベルの思想を叙述しつつマルクスを比較して、マルクスは怨恨、ルサンチマンを動機として思索したけれども、ベルは愛を動機として思索していると言っています。たしかにベルを読んでみて、本当にそうだと思います。人間と社会の現実には、樂觀できない。が、その中から希望や可能性を何とか見出そう、創り出そうとする思索の中にやっぱ愛が感じられます。ラインホルド・ニーバーの影響でありましょうか。

私たちは教育を通して、そうした愛とか希望とか信仰とか、聖書が大事にするようなものにせり上がりたい。そういう意欲を持って、教育の働きに従事させていただきたいと思っています。聖書的、宗教的に申しますと、靈性、靈的次元への関わりということでもあります。「靈的」とは私どもが永遠に目を向けている、永遠に向かおうとしている、私どもの実存が上に引き上げられて、上からつり上げられているそういうせっぱ詰まったあり方を取るときのことだ、と申せましょう。そのようにして、人間的な才覚の中だけでなく、それを超えるような生き方を取っているときに、私たちは、初めて学生たち、若者に同じような感化力を与えることができるだろうと思います。以下は、何かの機会にまたお話をさせていただくことがあるかもしれません。靈育、靈性の訓育ということが大事であります。それから「貢献」というキーワードも、先程我々の先輩ミッシヨナリーからも教えられたことあります。ドラッカーのこの書物でも、知識人の責任ということで、知識人は己の狭い専門領域だけに取り組んでいるだけでは足りません。それを横に連携して、全体として組織全体の目標に貢献できるようにしなければならぬ。そうでなければ、孤立した専門的な知識や単なるデータやメモリー、単なる情報でしかない。それは本当の意味の知識にはなりませんよと言っています。その点で、ダニエル・ベルも、情報と知識とを区別して、真の知識になればならないということを言っていることは先程申しました。

最後に、「結び」を申し上げて終わらせていただきます。今年は一〇〇周年であり、チャペルの竣工はそのエポック・メイキングな年にふさわしい出来事であります。学校法人聖学院は、既に聖学院教育会議を通して三年に渡って、聖学院教育の中心は何かを全学院的に研究してまいりました。私は、その一つの部会の責任を持たせていただきましたが、忘れがたい経験があります。

それは、幼稚園、小学校、中、高そして大学の先生と共に研究・協議してまいりましたが、大学の先生方は、小学校や中、高の教師たちの話をよく聞いてくれました。丁寧に聞いてくれました。そして、非常に評価してくださいました。これを三年続けてみて、私は深い喜びと確信を持つことができました。皆様のそうした幼、小、中、高の教師たちに対する寛大な、あるいは先程のガイ博士の言葉で言うと同情ある態度は、彼らを非常に勇気づけ(encourage)しました。

そして、聖学院大学に対する信頼と尊敬を倍加させました。これが、駒込キャンパスと大宮・上尾キャンパスが結びつく大きな動力になりました。学校としての形成は一番あとであったかもしれませんが、学校法人聖学院諸学校にはこの勢力、一九〇人がおられます。今、学校法人聖学院は教職員全体で三七七人、そのうちの一九〇人がここに集まっておられます。過半なのです。質的にも知的に、長兄です。どうぞ学校法人全体の動向をにらみながら、今後駒込キャンパスをご指導いただき、今後ともエンカレッジしていただきたいのであります。そして、どうぞこの学院の持つ歴史的な体質と、その中に脈々として続けられているミツシヨナリー・スピリット、フロンティア・スピリットを受け継いでいただき、いろいろ不如意なこともおありでしょうけれども、文句をおっしゃるよりは、一つポジティブにお考えいただきたいのです。アクセント・ザ・ポジティブス (accentuate the positives) という言葉を、ウイリアム・G・クレラ先生から私は教わりました。「積極的なものを強調せよ」ということ

で、その精神で多くのよき伝統を今日的に開花させていただければありがたいと思います。私も駒込キャンパスは、上尾の大学キャンパスにおられる皆様をそういう意味でまぶしく思いながら、期待申し上げております。どうもご静聴ありがとうございました。

（本稿は、二〇〇四年一月七日―八日に開催された新年教職員研修会における同名の講演に手を加えたものである。）